

コメヌカ酵素分解物

1. 食品添加物名

コメヌカ酵素分解物（脱脂米ぬかから得られた、フィチン酸及びペプチドを主成分とするものをいう。）

2. 基原、製法、本質

イネ科イネ（*Oryza sativa* LINNE）の種子より得られる脱脂米ぬかを酵素分解したものより、水で抽出して得られたものである。主成分はペプチド及びフィチン酸である。

3. 主な用途

酸化防止剤

4. 安全性試験成績の概要

（1）反復投与試験

F344/DuCrj(Fischer)系SPFラットを用いた、強制経口（100、300、1000mg/kg/日）投与による90日間反復投与試験を行った。その結果、死亡は見られず、一般状態、眼科学検査、尿検査、摂水量、血液学検査、血液化学検査、器官重量、剖検及び病理組織学検査のいずれの項目にも被検物質投与に起因する変化は見られなかった。

体重では、1000mg/kg投与群の雄で投与期間の前半に対照群をやや下回ったが、一時的でごく軽度な変化であり、投与期間終了時の平均体重に差はなかったことから、毒性学的意義の低い変化と考えられた。

摂餌量では、300及び1000mg/kg投与群の雄で対照群をやや下回る測定時点が散見されたが、ごく軽度な変化であり、投与期間終了後の体重への影響もみられなかったことから、毒性学的意義の低い変化と考えられた。

以上のことから、無毒性量は、雌雄ともに1000mg/kg/日を上回ると考えられた。¹⁾

（2）遺伝毒性試験

細菌（TA98、TA100、TA1535、TA1537、WP2uvrA/pKM101）を用いた復帰突然変異試験は、5000µg/プレートまで試験されており、代謝活性化の有無にかかわらず陰性であった。²⁾

哺乳類培養細胞（CHL/IU）を用いて、最高処理濃度5.0mg/mLの染色体異常試験を行った結果、いずれの処理条件下においても染色体異常の誘発はみとめられなかった。³⁾

マウス（BDF₁系、雄）の骨髓を用いた小核試験は、最大耐量である2000mg/kg \times 2まで試験されており、いずれの用量においても小核の誘発は認められなかった。⁴⁾

（引用文献）

1. 小野宏：平成15年度既存添加物の安全性に関する試験、（財）食品薬品安全センター秦野研究所

2. 松元郷六：平成13年度厚生科学研究費補助金（厚生科学特別研究事業）既存天然添加物等の変異原性を中心とした安全性研究、（財）残留農薬研究所

3. 中島圓：平成13年度厚生科学研究費補助金（厚生科学特別研究事業）既存天然添加物等の変異原性を中心とした安全性研究、（財）食品農医薬品安全性評価センター

4. 中島圓：平成13年度厚生科学研究費補助金（厚生科学特別研究事業）既存天然添加物等の変異原性を中心とした安全性研究、（財）食品農医薬品安全性評価センター